（幼稚園）
年長児

人とかかわる力を育てるための援助の工夫

～年中児との交流を通して～

浦添市立教育研究所　教育研究員

浦添市立牧港幼稚園　　小谷美枝子

目次

Ⅰ　テーマ設定の理由・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
Ⅱ　目ざす子供像・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅲ　研究の目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅳ　研究仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　１　基本仮説
　２　作業仮説
Ⅴ　研究構想図・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
Ⅵ　研究内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
　１　幼児期における人とのかかわり
　２　異年齢交流の意義
　３　発達に応じた年長児・年中児の年間交流計画作成
Ⅶ　保育実践・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6
　１　活動名
　２　交流保育活動設定理由
　　（１）交流の必要性
　　（２）幼児観
　　（３）指導観
　３　保育実践の計画
　４　実践「保育１　年中児と一緒に楽しく過ごす」・・・・・・・・・・7
　　「保育２　ホットケーキ作りを楽しむ」・・・・・・・・・・・・8
　　「保育３　わらべうた遊びを楽しむ」・・・・・・・・・・・・・9
　　「保育４　フォークダンス・イス取りゲームを楽しむ」・・１０
　　「保育５　輪つなぎ作りを楽しむ（検証保育）」・・・・・・１１
Ⅷ　研究の考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１４
　１　作業仮説（１）の検証
　２　作業仮説（２）の検証
Ⅸ　研究の成果と課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１６
　１　研究の成果
　２　今後の課題
【おわりに】
【主な引用・参考文献】

年長児

人とかかわる力を育てるための援助の工夫

ー年中児との交流を通してー

浦添市立牧港幼稚園　小谷美枝子

【要約】

人とかかわる力を育てるため、一時期、四歳児五歳児の異年齢学級編成をし、生活を共にしながら様々な感情体験ができる活動を取り入れてみた。その結果年中児を思いやる場面が見られたり、自己中心的だった子が、相手を気づかい、やさしく接していくなど人とかかわる力の育ちが見られた。

キーワード　□人とかかわる力　□異年齢学級編成　□年間交流計画

Ⅰ　テーマ設定の理由

今日、子どもを取り巻く環境は、核家族化、少子化、科学技術の著しい進歩により大きく変化している。物質的な不自由は感じない環境の中で、テレビやテレビゲームを相手に一人で過ごす子どもが増えてきている。家庭や地域においても兄弟や近隣の人とかかわる機会が減少してきている。

自分と他人との認識ができてくる幼児期に、多くの人とかかわる体験を通し、人とふれあう楽しさや喜びを味わうことは大切であると思われる。

幼稚園教育要領、領域「人間関係」のねらいの中に「進んで身近な人とかかわり愛情や信頼感をもつ」とある。その中で幼児は幼稚園生活において他の多くの幼児や教師とふれあう中で、自分の感情や意志を表現しつつ、自己の存在感や他の人々と共に活動する楽しさ、自分とは違った様々な人への積極的な関心、共感や思いやりをもつようになると述べられている。

浦添市では二年保育が始まり、異年齢とのかかわりを持つことができるようになった。本園でもこれまで、いろいろな交流を試行錯誤し実施してきた。その結果、年長児は年中児の面倒を見たり、同年齢同士では許さないことでも小さい子だからと許して優しく接したりする姿が見られた。年中児は年長児のまねをして生活の仕方を学び、自分たちも年長のようにできるようになりたいと、あこがれの気持ちをもって見ている。しかし、中には年下の子とのかかわりかたを知らず、自分の思いだけを通そうとする子もいる。年中児の中には年長児に圧倒され遊びに入れない子もいる。これらのことは交流する中で、異年齢がかかわることのできる環境や、教師の援助が弱かったのではないかと考えられる。

子どもは、子ども同士で遊んだり、異年齢児と一緒に育ち、かかわることによって、自分自身を成長させていく。同年齢同士でかかわる事はもちろん大切であるが、それを踏まえて異年齢児と生活を共にする中で自然なかかわりを持ち、そして遊びを楽しむ中で人とのかかわりが育つと思われる。そのために、様々な感情体験をする交流活動を工夫し、積み上げることで人とかかわる力が育つであろうと考え本テーマを設定

した。

Ⅱ　目指す子ども像

相手を思いやり、人とかかわることを喜ぶ子

Ⅲ　研究の目標

人とかかわる力を育てるため、様々な感情体験をする交流活動のあり方について実践的に研究する。

Ⅳ　研究の仮説

1　基本仮説

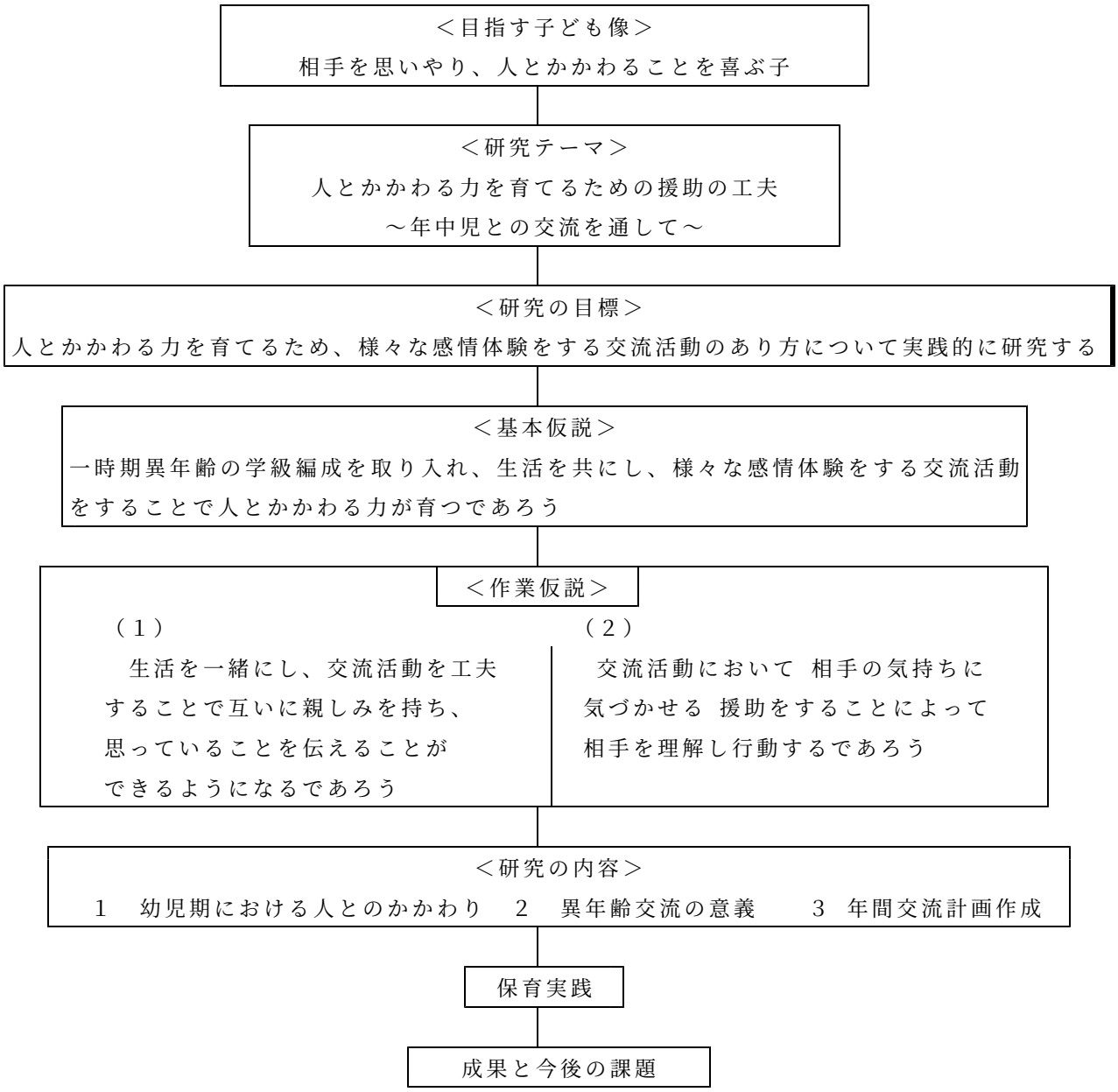
一時期異年齢の学級編成を取り入れ、生活を共にし、様々な感情体験をすることで人とかかわる力が育つであろう。

2　作業仮説

(1) 生活を一緒にし、交流活動を工夫することで互いに親しみを持ち、思っていることを伝えることができるようになるであろう。

(2) 交流活動において相手の気持ちに気づかせる援助をする事によって、相手を理解し行動するであろう。

Ⅴ研究構想図



Ⅵ　研究内容

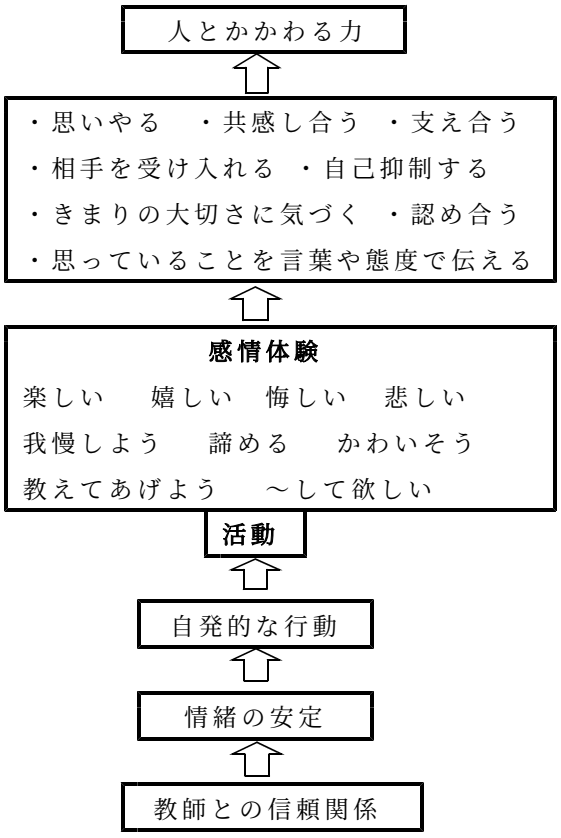
1　幼児期における人とのかかわり

(1)人とかかわる力の育ち

人とかかわる力とは，自分の思っていることを言葉や態度で相手に伝え，相手の思っていることを受け止め，お互いの存在を認め合っていく。そしてお互いに支え合ったり思いやったりしながら，人と一緒にいることの楽しさを感じ，共感し合うことができる，それが「人とかかわる力」と捉える。

人とかかわる力の基礎は，自分が親や周囲の人々に温かく見守られているという安定感から生まれる人に対する信頼感をもつこと，さらにその信頼感に支えられて自分自身の生活を確立していくことによって培われる。幼稚園生活においては，何よりも教師との信頼関係を築くことが必要であり，それを基盤としながら様々なことを自分の力で行う充実感を味わうようにすることが大切である。またこうした生活の中で，自分の感情や意志を表現しつつ，他の人々と共に生活する楽しさや大切さを知り，そうした生活のために必要な習慣や態度を身につけていくことが，人とかかわる力を育てることになるのである。

(2)幼稚園における人とかかわる力が育つ過程



2　異年齢交流の意義

幼児期には，幼児は自分以外の幼児の存在に気付き，友達と遊びたいという気持ちが高まり友達とのかかわりが盛んになる。相互にかかわることを通して，幼児は自己の存在感を確認し，自己と他者の違いに気付き，他者への思いやりを深める。そして集団への参加意識を高め，自律性を身に付けていく。このように，幼児期には社会性が著しく発達していくものである。また，このような友達とのかかわりの中で，幼児は相互に刺激し合い，様々なものや事柄に対する興味や関心を深め、それらにかかわる意欲を高めていく。それゆえ幼稚園生活では，幼児が友達と十分にかかわって展開する生活を大切にすることが重要である。そして幼稚園は，異なる年齢の幼児が共に生活する場である。年齢の異なる幼児間のかかわりは，年下の者への思いやりや責任感を培い，また，年上の者の行動へのあこがれを生み，それを自分のものにしようとする意欲も生む。年齢が異なる幼児が交流できるような環境の構成をしていくことも大切である。

3　発達に応じた年長児・年中児の年間交流計画作成

幼稚園教育要領では、年齢が異なる幼児が交流できるような環境の構成をしていくことが大切であると述べられている。

交流するにも幼児期にふさわしい生活が展開され、幼児の発達に沿った活動を精選し、計画をしなければならない。発達の姿を考慮し、園の実態、幼児の実態に合わせ、また教師間の交流も大切であることを念頭に置いて、年間交流計画の作成に取り組んだ。

四歳児・五歳児の発達の姿

学年	時期	発達の姿
四歳児	４月～６月	○教師の側にいることで安定を見いだそうとしている反面、友だちや新しい生活に期待をよせている。
	６月～９月	○友だちへの関心が芽生えて、遊び仲間ができてくる。しかし意見が合わなかったり、トラブルが増えてくる。
	９月～１月	○年長組の遊びを意識して、自分たちも真似してみようとしたり、自分の思った通りに行動してよいことがわかり、自分なりの遊びを積極的に試したり、挑戦したりする。
	１月～	○基本的生活習慣がほぼ自立するようになり、遊びに必要な簡単な技能や遊び方の理解ができるようになり、教師に頼らなくても遊び方が進められるようになってくる。
五歳児	４月～６月	○年長組になった喜びと自覚が感じられ、積極的に園生活を行おうとする。
	６月～９月	○仲間意識が育ち数人の中で意志統一が可能になって、自分の興味を追求したり没頭したりするようになる。
	９月～11月	○友だちに対する信頼や思いやりが芽生える一方、力関係への不安定がある。
	11月～１月	○友だちの良い面がわかり、お互いに認め合うようになる。遊びの内容も充実し、行動する姿もしっとりと落ち着いて、質的なまとまりが感じられるようになる。
	１月～	○生活態度がしっかりしてきて年少児への活動の引き継ぎも、スムーズに行えるようになり、園への愛着を感じながら、園生活を充実させるようになる。

平成１２年　沖縄県　幼稚園教育課程編成要領より

年長児と年中児の年間交流計画	人とかかわる力を育む

教育目標　「心豊かで自立する子の育成」

〈つよいこ〉
- 進んで遊べる子
- 意欲的に取り組める子
- 元気よく挨拶できる子

〈なかよくするこ〉
- 友達と仲良くする子
- 思いやりのある子
- 動物をかわいがる子

〈かしこいこ〉
- 人の話がしっかりきける子
- 思っていることをはっきり言える子
- 善悪の判断ができる子

期		第１期	第２期	第３期	第４期	第５期
月		４月　　５月	６月　　７月	９月　　１０月	１１月　　１２月	１月　　２月　　３月
テーマ		先生となかよし	友達っていいな	友達さそって	力をあわせて	みんな仲良し
発達の過程	年長	○遊びや教師との触れ合いを通して、園生活に親しみ、安定していく。	○ 気の合う友達とかかわりなら遊びを広げていく。	○友だちとイメージを伝え合い、共に生活する楽しさを知っていく。	○友だちとのつながりが深まり自分の力を発揮していく。	○友だち同士で目的をもって生活を展開し、深めていく。
	年中	●教師の側に居ることで安定を見出そうとしている反面、友達や新しい生活に期待を寄せている。	●クラスの友達にも慣れ、自分の好きな遊びを見つけて遊ぶようになってくる。	●トラブルが起きたときは、教師の援助を受けながら、自分達で　解決しようとする。	●友達と一緒に遊びを楽しむ中で必要な物を考えて遊びを広げて行こうとする。	●友達と一緒に遊びを進めながら、持続して楽しく遊べるようになる。
ねらい	年長	○園生活に慣れ、教師や友だちに親しみを持って遊ぶ。	○同じ場や遊びの中で友達と触れあい、かかわって遊ぶ。	○友達や教師と一緒に体を動かしたり競ったり、挑戦したりしてあそぶ。	○友達と一緒に考えたり工夫しながらやり遂げようとする気持ちをもつ。	○自分の考えを伝えたり友達の考えを受け入れたりして、協力しながら遊びを進めていく。
	年中	●教師や友だちに親しみをもち、好きな遊びを見つける。	●好きな遊びを見つけ、友達や教師とかかわってあそぶ楽しさを味わう。	● 友だちとのかかわりの中で様々な葛藤を重ねながら一緒に遊ぶ楽しさを味わう。	●友達とイメージを出し合いななが ら、遊びを進めていく楽しさを味わう。	● 友達の良さに気づき、一緒に活動する楽しさを味わう。
交流計画		☆誕生会 → 年長児の話し方や聞き方を見ることで次年度へつなげる ☆映写会 → 共通の体験をする ☆体育館での集会 → 一緒にいろいろな事を体験することで相手を理解する				
			☆弁当を一緒に食べる → 一緒に弁当を食べて楽しく過ごす ☆園外保育に手をつないで一緒に行く → 年長児に年中児をリードさせる ☆集団遊びをする（年長児が年中児の部屋に行く） 年中児が安定する部屋で、年長児にリードしてもらう。 ☆劇場ごっこなどの遊びへ年長児が年中児を招待する 年長児の部屋に担任と一緒に入る事で、緊張感をなくすようにする。 ☆年長児の教師が年中児へ絵本などの読み聞かせをする 年中児のクラスに入り保育する事で、不安をなくしより親しくなる。	☆運動会の練習を年長がリードしながら一緒にする 一緒に練習することでイメージを持たせる。 ☆交流保育を一度設定する 同じ場所で、同じ活動をすることで親しくなる。	☆異年齢の学級編成をし、１日生活を一緒にする お互いに親しみを持ち、相手を理解する。 ☆異年齢の学級編成をし、数日生活を一緒にする お互いに親しみを持ち、相手を理解する。 ☆発表会について話し合いをもち一緒に練習する 一緒に練習する事でイメージを持たせる。そして次年度へつなげるようにする。 ☆お楽しみ会の出し物に一緒にでる 年長児がリードしながら練習をする。	☆お店屋さんごっこを一緒にする お互いを理解しながら遊びを進める。 ☆年長児がやっている飼育当番を年中児はやり方を教えてもらいながら手伝う 年長児は年長児としての自覚を持ち、年中児は次年度への期待につなげる。 ☆年長児がやっているカレー作りを年中児はそばで見る 次年度への期待につなげる。

Ⅶ　保育実践

1　活動名

異年齢の交流保育で楽しく遊ぼう

2　交流保育活動設定理由

(1)交流の必要性

幼稚園は幼児にとって多くの友だちと出会い、教師と友だちとのふれあいの中で様々な人間関係や感情体験を通して、心身共に成長していく場である。同年齢の子ども同士は日常の生活や遊びを共にすることが多く、互いに自分の力を発揮しながら遊びを楽しむ事ができる。しかし異年齢の子どもとのふれあいは機会が少なく、どのようにかかわれば良いのか戸惑ってしまうことも多いと思われる。気持ちが開かれて親しくなり、不安や警戒心が和らいで相手の気持ちに気づき、思いやりや優しさをもってかかわっていけるようになるため、異年齢児とかかわる経験は幼児の成長にとって大切な事である。そのために異年齢の学級編成をし援助の工夫をしながら人とかかわる力の育ちを促していきたい。

(2)幼児観

園庭では年長児と年中児が遊んでいるが、よく見ると同年齢同士で遊んでいる。年中児は年長児の遊びに圧倒され、すみの方でかたまりになって遊んでいる様子が見られる。年長児は年中児が年下で幼いという事を知らず、自分の思いを通そうとする子などがいる。それはあまりかかわりがないためと考えられる。そのために年長児、年中児が遊びの中でスムーズにかかわれるように、援助を考えていく必要があると思われる。

(3)指導観

異年齢の学級編成をし、生活を共にしながら一緒の活動をすることでお互いが親しくなる。そして教師の援助を得ながら様々な感情を体験することで、相手の気持ちに気づくようになり、遊びの中で自己抑制することを知り、相手を受け入れ、思いやりや優しさを持ってかかわっていき、人とかかわる力が育まれると考える。

3　保育実践の計画

	主な活動	子どもの育ち	教師の援助
保育1	・新しいクラス名を決める ・絵本を見る ・戸外遊びを知る ・おやつを食べる ・室内で遊ぶ	年中児と一緒に楽しくすごす	年長児と年中児の緊張感が和らぐような雰囲気づくりをする
保育2	・ホットケーキ作りをする	年長児、年中児の混合グループでケーキづくりを楽しむ	年長児が中心になってケーキづくりができるようにさせる
保育3	・わらべうた遊びをする	年長児、年中児でパートナーをつくり、わらべうた遊びを楽しむ	年長児、年中児がふれあえるようなわらべうた遊びをさせる
保育4	・フォークダンスをする ・イス取りゲームをする	年長児、年中児でパートナーをつくり、フォークダンスを楽しむ ルールのあるゲームを楽しむ	フォークダンスやゲームを年長児にリードさせるようにする
保育5	・輪つなぎ作りをする	年中児へ教えながら輪つなぎ作りを楽しむ	できなくて困っている年中児に年長児が教えてあげるようにさせる

4 保育１

（１）ねらい　　１２月１０日（水）

・年中児と一緒に楽しくすごす

（２）

主な活動	教師の援助・環境	留意点
・新しいクラスの名前を決める	・新しいクラス名を考えさせる	・たんぽぽ組（年長児）とすみれ組（年中児）の混合クラスなので覚えやすい動物の名前にするよう促す
・絵本を見る	・手遊びをする	・楽しい読み聞かせができるような雰囲気作りをする
・戸外遊びをする 泥団子作り スケーター 砂場遊び 木登り 固定遊具	・砂場用具、スケーターが使えるように準備をする	・一人ひとりに声をかけながら遊ぶ様子を見守る ・年中児も一緒に用具を片づけさせ、足を洗い部屋に入るようにさせる
・おやつを食べる	・グループを年長児、年中児の混合にする ・机には前もって名前のシールを張っておく	・年中児が不安にならないように席を決めておく
・室内で好きな活動をする 折り紙　ままごと 積み木　絵をかく ぬり絵	・色紙、積み木、ぬり絵、白紙を準備する ・ままごとのコーナーを整える	・楽しく遊べるような環境作りをする

（３）子どもの様子

①戸外遊びの時、四人の年長児の女の子達は、自分と同じグループの年中児の女の子達を誘い砂場でままごとを楽しんでいた

（写真１）

（写真２）

②自己中心的で幼い年長児の G 夫が年中児と戦いごっこを始めたので、「G 夫さん、気をつけてよ」と声をかけると「わかってる、やさしくすればいいんだろう」と返事が返ってきた。しばらく戦いごっこが続いて、年中児にたたかれたり蹴られたりしていたがおこることもなく楽しそうに遊んでいた。

③牛乳パックを年長児が小さくたたんでいるのを見て、教師がほめてあげると、年中児が年長児に頼んで教えてもらったり、また年長児が「やるかー？」と声をかけ年中児の牛乳パックをたたんでいる様子が見られた。

（３）考察

・子どもの様子①から年長児の女の子達は、今日は年中児と遊んであげなくてはいけないという意識があったようで、年中児に合わせて遊んでいる様子が見られた。

・②の戦いごっこをしたＧ夫は同年齢の子と戦いごっこをする時は、たたいたりする事もあったが、本気で向かってくる年中児を相手に、やさしく接し遊びを続けていた。②の下線からは自分は年上だと意識してきたようだ。

・③では教師が牛乳パックのたたみ方を大げさにほめた事で年中児は興味を持ち、年長児に自分の思いを伝えることができ、また年長児はほめられた事で年中児にやさしくできたと思われる。

保育２　　１２月１５日（月）

（１）ねらい

・年長児、年中児一緒のグループでホットケーキ作りを楽しむ

（２）

主な活動	教師の援助・環境	留意点
・絵本を見る ・ホットケーキ作りをする ・戸外遊びをする	・年長児、年中児の混合グループにする ・グループごとに用具と材料を準備し、分量もはかっておく	・年長児が中心になってケーキ作りができるようにする ・材料を入れて混ぜるところから全部自分たちでできるようにさせる

（３）子どもの様子

①年長児が中心になりケーキ作りをしていた。年中児に混ぜさせたり、焼く時に誘って一緒に連れてきたりする様子が見られた。

②軽いやけどをした子を年長児が「大丈夫？」と声をかけ、心配しながら寄り添ってしばらく水道水で冷やしてあげていた。

③年長児は普段より積極的に片づけや掃除をしていた。

④年中児のＡ夫とＢ夫が戦いごっこをしているうちに、Ａ夫が足を強くたたかれてしまい泣きそうになっているのを見て、年長児のＧ夫とＤ夫が仲裁に入った。Ｇ夫がＢ夫に向かって「謝れ、早く謝れ」、Ｄ夫はＧ夫を制止して「待て、事情を聞いてから」。いろいろ聞いているうちに年中児の二人がにこにこしてきたので、最後に握手をさせて仲直りをさせた。

（４）考察

・③の年長児が積極的に掃除に取り組んだのは、年中児は小さいので自分たちが頑張ろうというやさしい気持ちが出たと思われる。

・④の戦いごっこで泣きそうになった年中児は、年長児の声かけに嬉しくなり笑顔が

出てきたと思われる。また年長児は親しみがあるから解決してあげようという気持ちになったと思われる。

保育３　　１２月１６日（火）

（１）ねらい

・わらべうた遊びを楽しむ

（２）

主な活動	教師の援助・環境	留意点
・絵本を見る ・わらべうた遊びをする なべなべそこぬけ げんこつ山 かごめかごめ 花いちもんめ ・戸外遊びをする ・弁当を食べる	・年長児、年中児でパートナーをつくる ・教師も一緒に輪の中に入る ・混合グループで座る	・年長児、年中児でパートナーがつくれるように数の確認をしておく ・年中児が経験した事があり、ふれあえるようなわらべうた遊びをさせる

（３）子どもの様子

（写真３）

①なべなべそこぬけを失敗したり、ジャンケンで勝った負けたと大騒ぎをしていた。

②かごめかごめで、年長児のＹ子と年中児の間に指が指され年中児が前に出て行った時、Ｙ子は不満そうではあったが何も言わなかった。

③花いちもんめで年長児と年中児に対戦が決まった時、どうするのか問題になった。年長児のＨ夫が「引っ張る」と主張するそばで、年長児のＫ子が「すみれ組だよー。引っ張ったら駄目ー」と言ったので、ジャンケンをすることになった。

④弁当を食べ終わった年長児のＡ子が、「年中児のＣ子が弁当を食べられない」事を伝えにきた。残していいことを伝えると席に戻りＣ子に声をかけ、弁当箱の片づけを手伝っていた。

（写真４）

（４）考察

・②のＹ子は活発で何でもやりたがる子なので、同年齢だと「自分だ」と主張していたと思うが、その日は相手が年中児なので我慢していたように思われる。

・③の花いちもんめの対戦方法が年長児同士では「引っ張る」事が多いのだが、相手が年中児だと言うことでジャンケンに決まったのは、年下の子を思いやる気持ちが出たと思われる。

保育４　　１２月１７日（木）

（１）ねらい

・フォークダンスやゲームを楽しむ

（２）

主な活動	教師の援助・環境	留意点
・絵本を見る ・フォークダンスをする ジングルベル 赤鼻のトナカイ ・イス取りゲームをする ・戸外遊びをする	・年長児、年中児でパートナーをつくる ・新しいダンスやルールのあるゲームをする	・年長児、年中児でパートナーがつくれるように数の確認をしておく ・年長児は経験があるのでリードさせるようにする ・ゲームでトラブルが起きた時はできるだけ自分たちで解決させるようにする

（３）子どもの様子

（写真５）

①年長児は年中児をリードしてフォークダンスをしている様子が見られた。

②応援の時、席を立つことの多い年長児のＧ夫は、今日は一緒に応援を頑張っていた。

③イス取りゲームで同時に座ってしまった年長児と年中児がいたが、年長児がすぐ席を譲ってあげる場面が見られた。

④年中児が大きな声で応援しゲームを楽しんでいた。

（４）考察

・②の最初に応援席に着くことになったＧ夫はこれまではすぐローカに出て行ったり水を飲みに行ったりしていた。この日最後まで頑張れたのは、年長児として我慢する事も必要だということがわかってきたのだと思う。

・ダンスやゲームを進める中で、③のように年長児は年中児を気づかいながら動いている様子が見られた。

・④で応援する年中児が大きな声を出していたのは、ダンスやゲームをすることで緊張感も和らいで、親しみを感じてきたからだと思われる。

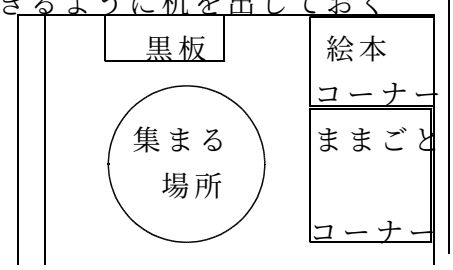
保育５ （検証保育）

授業仮説

○製作活動をグループで一緒にすることで、年長児が手伝ってあげたり、教えてあげたりするなど思いやる気持ちをもつであろう

検証保育指導案

日時	平成１５年　１２月１９日（金）　　９：００～１０：３０		
対象	うさぎ組（一時期編成した年長組たんぽぽ組と年中組すみれ組の混合クラス名） 五歳児（男児６名 女児６名）　四歳児（男児６名 女児６名）　計２４名		
主題	グループで一緒に輪つなぎを作ろう	ねらい	・友達と一緒に輪つなぎ作りを楽しむ ・年中児へ教えながら作業を進める
子どもの姿	年長児（五歳児） ・明るく元気なクラスで、女の子がしっかりしていて男の子をリードしている。 ・砂遊びが大好きで、男の子は役割を決め遊んでいる様子が見られる。 ・困っている子がいるとすぐ手伝うなどやさしい面を持っている。 ・交流が始まってから、年中児がクラスに入って来ても自然体で受け入れ、遊んであげるという意識がある。 年中児（四歳児） ・集団生活が始めての子や、家庭保育の子が多い。 ・うさぎ組に来た１４人中８人は、一人っ子かまたは第一子である。 ・女の子は特におとなしく自分からはなかなか人前で発表しようとしない。 ・交流が始まってから年長児のクラスに入ってきてままごとをすることがある。 ・ハサミは切り落とし、直線切りを経験している。		

時間	活動の流れ	◎教師の援助　☆環境構成
8:15 8:40	○登園 ・挨拶をする ・所持品を片づける ・名札をつける ○朝の会 ・出席の確認 ・今日の日程の確認	◎一人ひとりと挨拶をし笑顔で迎える ☆活動がスムーズにできるように机を出しておく 

	・きょうりゅう組の子は年中クラスに移動して交流する。	5 3 1 グループ（６） 6 4 2
9:00	○集まる ・手話をする ・絵本の読み聞かせをする「まどからおくりもの」	◎楽しい読み聞かせができるような雰囲気をつくるため手話をする ◎お楽しみ会に向けて期待を持たせるように、クリスマスに関する絵本の読み聞かせをする
	○輪つなぎ作りについて話を聞く	◎輪つなぎを見せて、年長児は年中児に作り方を教えてあげるように話をする。 ◎ハサミの安全な持ち方について再確認する ◎四人の輪つなぎをつないで前にあるカゴに入れるように声をかける ◎グループで手ふきの準備や片付けをするよう声をかける
	○ハサミ、のりをとってきて席に着く ・手ふきの準備をする ・作り始める	☆準備するもの ・色紙　・手ふき　・カゴ　・ハサミ　・のり ☆色紙は線を引いて切りやすいようにしておく ◎年中児ができなくて困っている様子に気がつかない時は年長児に気づかせる声かけをする
10:00	○片づける ・ハサミ、のりはカゴの中へ片づける ・できた輪つなぎは前にあるカゴの中に入れる	◎輪つなぎはグループみんなで持ってくるように声をかける
10:10	○集まる ・グループで床に座る	◎今日の活動について子ども達の話を聞いてみる ・輪つなぎの長さをくらべてみよう ・部屋に飾ることを話し、すみれ組の部屋はどうするか聞いてみる ・年中児が困っている時どうしてあげたか聞いてみる
10:30	○おやつの準備をする	

＜授業仮説の結果と考察＞

（結果）

・細く切った紙をどうやって輪っかにし、つないでいくのかわからない年中児に、年長児はとても丁寧に教えていた。
・女の子の中には、そばにいる年中児を時々見ながら、見守ったり、教えたりしていた。
・四人の輪つなぎを一本にする時は年長児が中心になってつないでいた。

（考察）

・作り方がわからなかった年中児に、とてもやさしく丁寧に教えたり、手伝ってあげている場面で、年長児の思いやる気持ちが見られた。
・輪つなぎを作る時、一人ずつ作るのではなく、年長児と年中児が一緒に一つの輪つなぎを作るようにすれば、もっと会話も出て手伝ってあげる場面も多かったと思う。

（写真１）年長児「ここにのりをつけるんだよ」

（写真２）「こうするとまるくなるよ」

（写真３）「ここからいれてね、くっつけるんだよ」

（写真４）年中児「ふ～ん、こうするんだー」

Ⅷ　研究の考察

１作業仮説の検証

(1)作業仮説１の検証

生活を一緒にし、交流活動を工夫することで親しみを持ち、思っていることを伝えることができるようになるであろう。

（結果）

・交流を始めた時から名前を覚え、話しかけたり、遊びに誘ったりして園庭で一緒に過ごす姿が見られた。
・年中児は年長児担任にも自分から声をかけたり手をつないだりするようになり、親しみをもって接するようになった。
・年長児は年中児が部屋に入って来ると声をかけ、一緒に遊ぶ様子が見られた。
・弁当を残している年中児を見て「もう、食べないの」と声をかけ、教師に伝えにくるなど気づかう様子が見られた。

（考察）

・異年齢の学級で絵本の読み聞かせを一緒に体験したり、おやつや弁当を食べたり、同じ活動をする中で緊張感も和らぎ、より親しみを持つようになったと思われる。そして親しみを感じる中で、遊びに誘ったり、相手を気づかったりする態度が見られた。

　異年齢のかかわりは同じ場所にいて親しくなることから始まり、相手の思いに気がつくようになる。以上のことから生活を一緒にする場面を設定し、共に活動を行う事により、幼児は自分の思いを言葉や態度で表し、伝えていくと考える。

（写真１）年長児、年中児が一緒に砂場でままごとをする

（写真２）おしゃべりをしながら泥団子作り

（写真３）「のこすのかー」と年中児に聞いている

(2)作業仮説２の検証

交流活動において相手の気持ちに気づかせる援助をすることによって、相手を理解し行動するであろう。

（結果）

・年中児との戦いごっこをしていた幼いＧ夫が、教師の「気をつけてね」という声かけと心配そうにしている顔を見て、年中児にたたかれても我慢し、相手に痛い思いをさせないようにするなど同年齢との戦いごっことは違う態度で、年中児に最後までやさしく接していた。

・製作で年中児に教える時は、のりを付ける場所、紙の持ち方、輪っかのつなぎ方など、作業の一つひとつを丁寧に教えていていた。

・集団遊びで年長児は、年中児に合わせてルールを変えて遊びを進めていた。

（考察）

・戦いごっこでのＧ夫の行動や、製作でのやさしい教え方など、気づかせる声かけをすることで、教師の願いや援助が年長児に伝わったものと思われる。年中児にやさしく接している教師の姿や年中児の気持ちに気づかせる援助をすることによって、年長児は相手の気持ちを考え優しい気持ちで接し、行動すると思われる。そのことは、集団遊びに見られたように、交流を通して年長児が年中児の様子を理解した結果だと言える。

以上のことから交流活動では、互いの立場や様子に気づかせることにより、幼児は自分なりに理解し、行動するものと考える。

（写真１）たたかれても、蹴られても年中児にやさしくするＧ夫

（写真２）「こうするんだよ」やさしく教える年長児

（写真３）年中児「木登りしたい」
年長児「つかまえててあげるからね」

Ⅷ　研究の成果と課題

1　成果

○異年齢の学級編成をしたことで年中児と親しくなり、元のクラスに戻った後も遊びに誘ったりするなど交流する姿が見られるようになった。

○年中児との一緒の活動は年長児は年上という自覚が芽生え、我慢したり、教えてあげようという気持ちになってやさしく接するなど、人とかかわる力の育ちが見られた。

2　課題

○年間交流計画を実践し、検証しながら実態にあったよりよい方法を考えていきたい。

○異年齢間での相手の気持ちに気づかせるような援助の仕方を考えていきたい。

○教師間の話し合いを密にし、ティーム保育をさらに充実させて行きたい。

おわりに

二年保育が始まり二年目になります。昨年度の園児の様子を見て年長児と年中児のかかわりの弱さを感じ、人とかかわる力を育てるためにどうすればいいのかが課題となり本研究のテーマとして位置づけました。人とかかわる力を育てるためには、まず親しくなることからではないかと考え、年中児担任の協力をもらい異年齢の学級編成をしてみました。現場を離れての研究になるため子どもの様子を十分に把握できないことがあり残念でしたが、一学期にトラブルが多かった年長児の子が異年齢交流をする中で我慢したりやさしくしたりするなど変容を見せたことで異年齢交流の必要性を感じました。そして異年齢交流をし人とかかわる力を育てるには教師間の連携を密にし、ティーム保育の充実を図ることも大切なことだと思いました。年間交流計画をたてましたが、本実践はまだ緒についたばかりです。次年度は計画に沿って実践してみたいと思います。

最後になりましたが、研修期間中ご指導下さいました浦添市教育委員会の知念敏枝指導主事、神森幼稚園の名嘉房枝副園長、宮城幼稚園の仲里紀美子先生、本研究所の大城淳男所長、當間正和係長、山里昌樹指導主事、多くの貴重なご指導、ご助言、心より感謝申しあげます。そして研究所の職員の皆様ありがとうございました。さらに研究所での研修に快く送り出し、支えて下さった牧港幼稚園の又吉孝信園長と職員の皆様、この半年間の研修を共に支え合い、乗り越えてきた研究員のメンバーに厚く御礼申し上げます。

《主な参考・引用文献》

・文部省
『幼稚園教育要領解説』
（平成１１年度版）
・沖縄県教育委員会
『幼稚園教育課程編成要領』
（平成１２年）
・森上史郎・吉村真理子・後藤節美編
『保育内容「人間関係」』
ミネルヴァ書房
・大場牧夫編著
『人間関係』
ひかりのくに　1990
・信州大学教育学部付属幼稚園
『付属松本学校園公開研究会』
（平成１４年）